

# 渡良瀬遊水地を知りたい

(中・高校生・一般用)



## 目 次

I. 渡良瀬遊水地は、どんなところか	2
1. 渡良瀬遊水地はどこにあるの?	2
2. 渡良瀬遊水地のはたらき	3
II. 渡良瀬遊水地は、なぜ出来たのか	4
1. 谷中村の昔・今	4
ア. 遊水地になる前の谷中村のすがた	4
イ. 谷中村のうつりかわり	5
ウ. 谷中村のいま	6
2. 村の人々のくらし・産業	7
ア. 洪水被害を少なくする工夫	7
イ. 人々のくらし・産業	8
III. 渡良瀬遊水地が出来るまで	9
1. なぜ渡良瀬遊水地を作ることになったのか	9
ア. なぜ渡良瀬遊水地を作ることになったのか	9
イ. 渡良瀬遊水地の造成	11
2. カスリーン台風と渡良瀬遊水地の調節池化	12
ア. カスリーン台風による被害	12
イ. 渡良瀬遊水地と調節池化計画	13
IV. 渡良瀬遊水地の役割について	14
1. 渡良瀬遊水地のしごと	14
ア. 洪水を防ぐ	14
イ. 飲み水などに利用	15
2. 渡良瀬貯水池(谷中湖)の水質対策	16
V. 渡良瀬遊水地の環境について	18
1. 渡良瀬遊水地の自然環境	18
ア. 渡良瀬遊水地の自然	18
イ. ラムサール条約とは	23
2. 渡良瀬遊水地の環境保全	24
ア. 自然環境が保持されている理由	24
イ. 環境保全への取り組み	25
3. 渡良瀬遊水地の利用	26





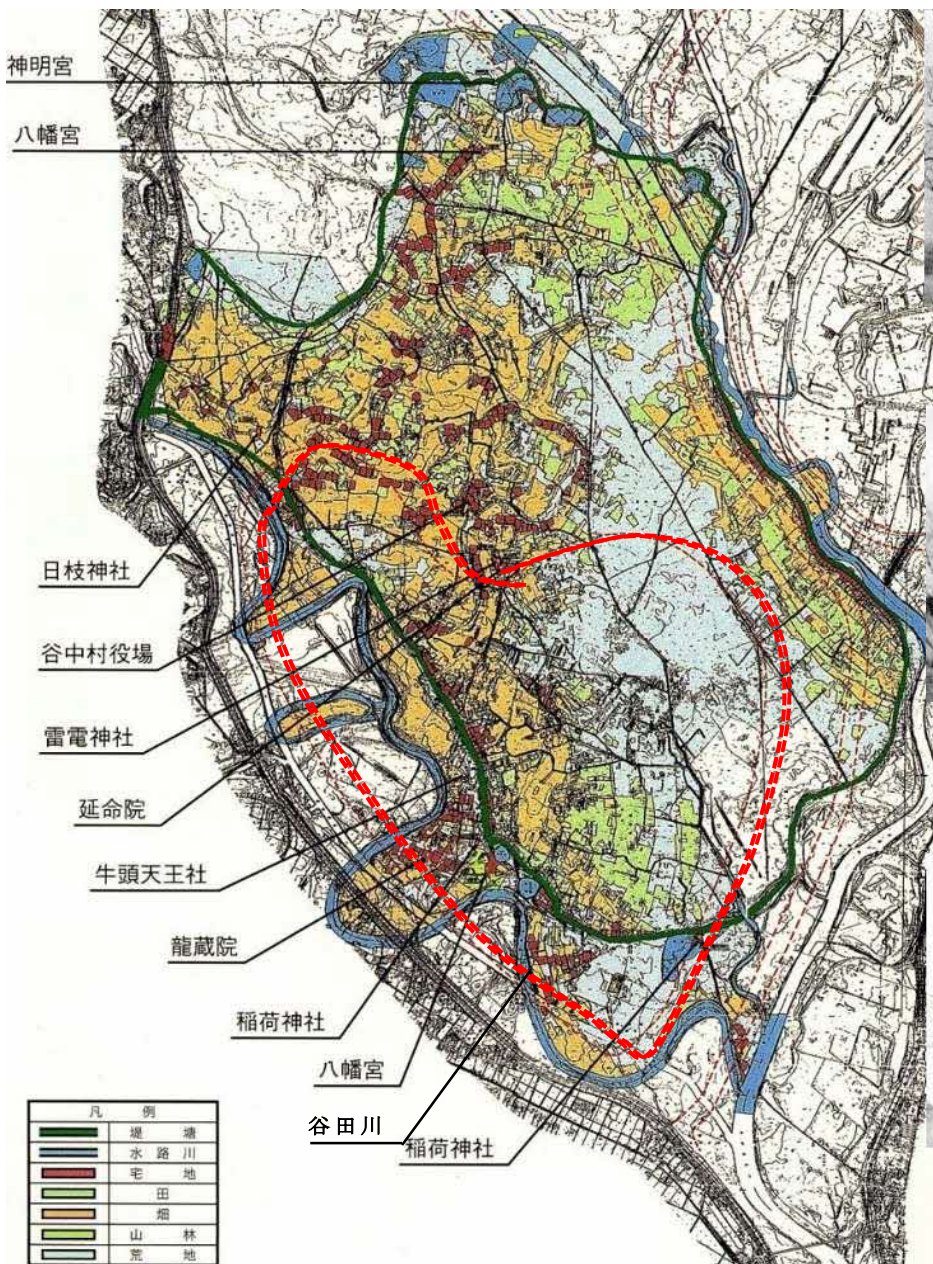
## II. 渡良瀬遊水地は、なぜ出来たのか

### 1. 谷中村の昔・今

#### ア. 遊水地になる前の谷中村のすがた

遊水地になる前、そこに遊水地の約 1/3 を占める谷中村があり人々が生活していました。洪水被害が起こりやすい地域でしたが、村人は周囲に堤を築き農業、養蚕業、漁業などを営み生活していました。

人口は、ピーク時が明治 36 年(1903)戸数 377 戸、人口 2,527 人からなる村で、周囲は一部の台地部を除き堤防で囲まれ、面積は、約 1,180 町歩(1,171ha)で、その内約 36%が原野で、約 32%が畑、約 15%が水田でした。



旧谷中村の家



旧谷中村の家  
(佐野市郷土博物館所蔵)



雷電神社

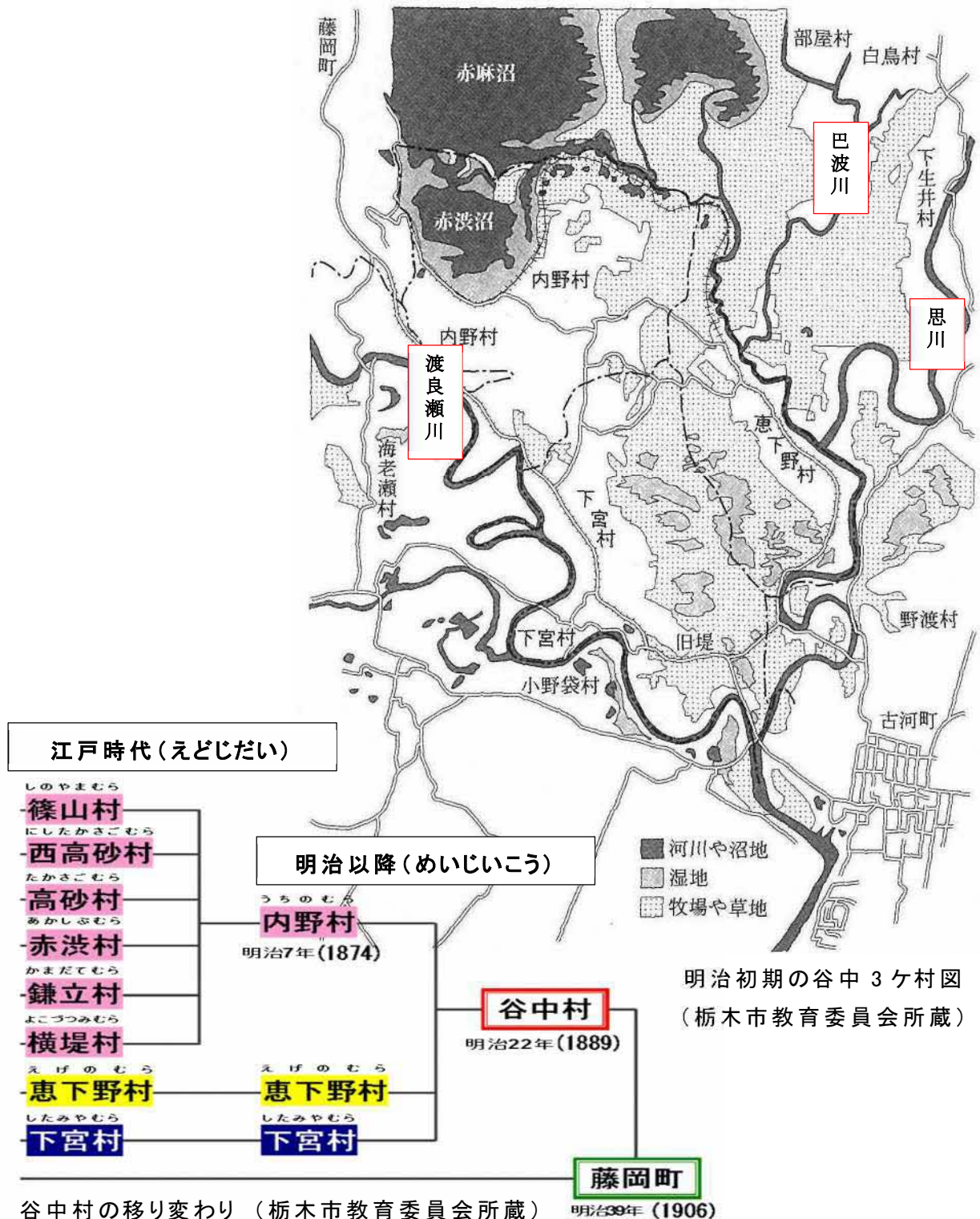
およそ 100 年前の谷中村の土地利用図(渡良瀬遊水地谷中メモリアル 100 より)

## イ. 谷中村のうつりかわり

江戸時代中頃、谷中村は、篠山村、西高砂村、高砂村、赤渋村、鎌立村、横堤村、恵下野村、下宮村の8ヶ村に分かれていました。(谷中8ヶ村)

明治7年(1874)に篠山村、西高砂村、高砂村、赤渋村、鎌立村、横堤村が合併して内野村となり谷中8ヶ村が谷中3ヶ村になりました。(谷中3ヶ村)

谷中3ヶ村も明治22年(1889)市制町村制の施行により各村が合併して、谷中村となりました。明治39年(1906)には、渡良瀬遊水地計画のため用地買収が始まり、谷中村は藤岡町(現栃木市)に合併され、谷中村は廃村になりました。



## ウ. 谷中村のいま

谷中村は低湿地帯であったため排水に悩んでいました。遊水地内には今でも旧谷中村の人々が生活していた跡が残っており、高く盛り土した施設の跡(延命院跡、雷電神社跡、役場跡)や排水機場(明治27年設置)の赤煉瓦基礎跡も昔の囲堤(かこいづつみ:周囲を堤防で囲む)とともに残っています。



延命院跡



雷電神社跡



役場跡



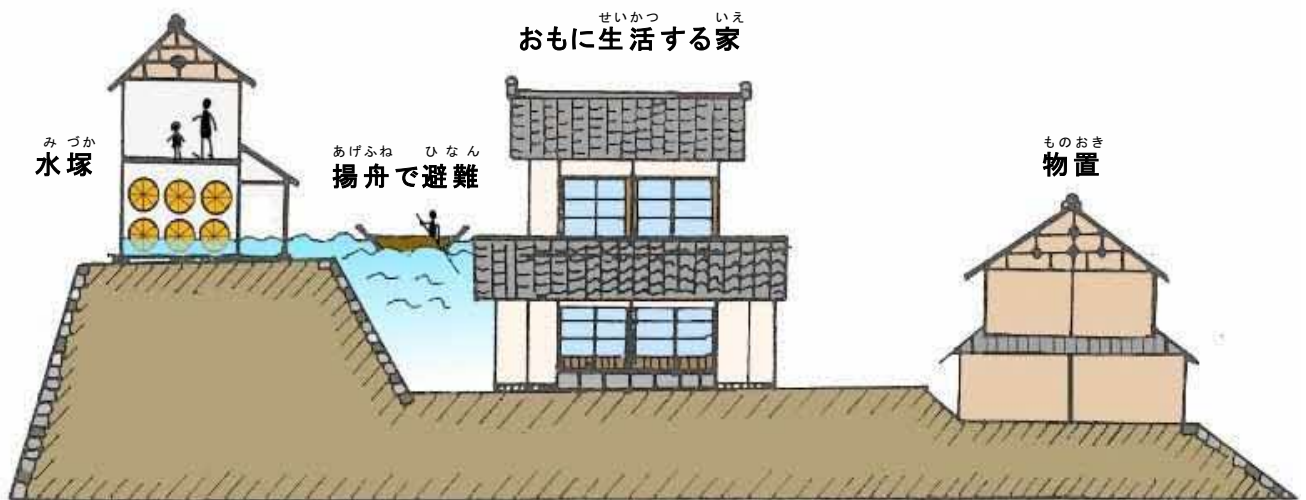
旧谷中村囲堤と排水機機場跡

## 2. 村の人々の暮らし・産業

### ア. 洪水被害を少なくする工夫

谷中村やその周辺地域では、明治時代に入り、ほぼ毎年のように洪水に襲われていました。水害常襲地帯の低平地での水との長い闘いの歴史の中で、人々は、水害から人命、家畜、食料などを守るため、屋敷の庭より3～5mの土盛りをした上に水塚(みづか)と呼ばれる蔵などの建物をつくり、穀類、味噌・醤油、衣類、器具・道具等を格納しておきました。

また、各家の母屋や納屋の天井や軒下には、洪水時の避難用あるいは物資を運ぶ手段として「揚舟(あげぶね)」が吊るしてありました。



揚舟(あげぶね)



水塚(みづか)

(1980「板倉町史別巻四」板倉町周辺湿地の治水と利水より)



## イ. 人々の暮らし・産業

### ○渡良瀬遊水地のヨシを使ったヨシズづくり

ヨシズづくりが大きな産業となるのは、人々が住まなくなった谷中村跡地に土砂が堆積してヨシが自生するようになったこと、関東大震災で被災した家屋を隠すために需要が高まったことによって生産が急増し、農閑期の副業として盛んになりました。

昭和 30 年頃には機械編みに代わり生産量も増大しましたが、昭和 40 年代半ばより、ヨシズの輸入が始まり次第に生産が減少し、現在では数軒での生産となっています。



ヨシズ作り  
(栃木市教育委員会所蔵)

### ○渡良瀬遊水地の沼や水路をつかった漁業

渡良瀬遊水地周辺は、大小の池・沼や水路があり、豊富な水量に恵まれ多くの魚が捕れ、それらを原料としたフナの甘露煮、小魚の佃煮、ナマズの天ぷらなどが名物となっています。



アミウケ漁



ザンブリ漁

### ○渡良瀬遊水地周辺での養蚕

養蚕は、明治 33 年頃から飼養戸数とマユの生産高、出荷高が急増し、生糸は明治期の重要な貿易品で国策として奨励され、養蚕は村人の確実な収入源でもありました。

※養蚕とは、繭(マユ)をとるために蚕を飼うことで、蚕の繭からとったままの糸を生糸と言います。



蚕



マユ

### ○渡良瀬遊水地の土をつかった煉瓦(レンガ)づくり

赤レンガの主材料である最適な粘土と砂が採取された渡良瀬川・思川合流点の下宮地先に仮のレンガ工場が建設され、これらの製品を使い、野木町にレンガ工場(ホフマン式レンガ窯)が建設されました。

現在のシモレン煉瓦工場跡です。



野木町レンガ工場  
(野木町所蔵)

### Ⅲ. 渡良瀬遊水地が出来るまで

#### 1. なぜ渡良瀬遊水地を作ることになったのか？

##### ア. なぜ渡良瀬遊水地を作ることになったのか？

明治に入り、度重なる洪水等により渡良瀬川沿川の農作地に多大な被害をもたらしました。足尾銅山は、明治に民間に渡り新たな鉱脈も発見され、銅生産は急速に増大しました。それに伴い、山火事、排煙で植物等は育たなくなり山腹は荒廃し洪水時には水の出が速く、鉱滓等を含んだ多量の土砂が農地に入り農作物への影響が生じ始めました。明治23年(1890)の大洪水をきっかけに、下流の農地での鉱毒被害が表面化し、大きな社会問題となり鉱毒反対の運動が始まり、行政府への請願活動が繰り返されていきました。さらに明治29年の洪水は、栃木、群馬、茨城、千葉の4県にまたがる地域に大被害が発生し、反対運動は一層大きく盛り上がり鉱毒被害の実態の公表と銅山の鉱業停止など国に求めるようになりました。



足尾銅山の様子

※鉱滓(こうさい)とは、精銅(純度の高い銅を取り出すこと)の過程できるカス(碎石)で、重金属を含んだ鉱滓が渡良瀬川、農地等へ流れ込み、魚の大量死、農作物(稲)の立ち枯れ等の被害が生じた。



足尾・久蔵川流域  
(昭和13年)



渡良瀬川の水があふれ、田畑に川の水がたまった様子  
(佐野市郷土博物館所蔵)

鉱毒被害の広がりや渡良瀬川の洪水の氾濫に伴うものであり、その対策の一つとして渡良瀬川の改修と遊水地の設置計画が表面化してきました。

渡良瀬川の魚や農作物に大きな被害を与えていた足尾銅山の鉱毒問題を国会で取り上げ、渡良瀬川沿いの人々を救うため努力した人物が「田中正造」です。正造は、谷中村の鉱毒問題と水害を解決するための遊水地計画について、人々と一緒に反対運動を起こしました。

## ・田中正造

田中正造は、栃木新聞(現・下野新聞)編集長を経て、県会議員となり、明治 23 年(1890)に第 1 回総選挙で衆議院議員に当選しました。代議士時代には、明治 24 年(1891)の第 2 回帝国会議で鉱毒被害に関する質問書の提出を始めとし、足尾銅山の鉱毒問題に取り組みました。明治 34 年(1901)には、代議士を辞職し鉱毒被害の惨状と被害民の救済を訴えるため明治天皇に直訴を試みましたが失敗しました。

その後は、渡良瀬川の遊水地計画の反対運動に尽力し、村民とともに村を守るために闘い、大正 2 年(1913)、73 歳の生涯を閉じました。

- 天保(てんぽう)12年(1841)11月  
下野国安蘇郡小中村生まれ  
(しもつけのくにあそぐんこなかむら)
- 明治13年(1880)  
栃木県会議員(補欠選挙)  
ほけつせんきよ
- 明治23年(1890)  
第1回総選挙で衆議院議員に当選  
しゅうぎいんぎいん
- 明治24年(1891)  
足尾銅山鉱毒を国会で質問
- 明治34年(1901)  
衆議院議員辞職・天皇に直訴状  
(鉱毒被害の惨状と被害民の救済)  
じきそじょう  
こうどくひがい さんじょう ひがいみん きゅうさい
- 明治37年(1904)  
谷中村問題に専念  
せんねん
- 大正2年(1913)9月  
足利郡吾妻町羽田で逝去  
せいきよ

「真の文明は 山を荒らさず 川を荒らさず  
村を破らず 人を殺さざるべし」



栃木県栃木市藤岡町(新開橋脇)

明治 23、29 年(1890、1896)の洪水等により渡良瀬川の鉱毒被害が発生し、大きな社会問題となりました。

政府は、明治 30 年(1897)に「足尾銅山鉱毒事件調査会」(第一次鉱毒調査会)を設置して、鉱毒の原因と予防方法を調査しました。鉱山側に 37 項目に上る予防工事命令を出し、これにより、新設された沈澱池、ろ過池は廃水中に含まれる銅分の除去に一定の効果を発揮しましたが、明治 31 年(1898)の洪水によりこれら予防施設の一部が破壊され、このことは被害住民による鉱業停止運動をより活発化させました。

明治 35 年(1902)政府は、鉱毒事件調査会(第二次鉱毒調査会)を設置し、鉱毒被害の対策の一つとして、渡良瀬川流域の治水対策が議論され、渡良瀬川の氾濫を防止するため堤防を造ることが検討されました。利根川への洪水の影響を与えないようにするため、藤岡台地を掘り、赤麻沼から谷中村に流入する遊水地化計画が具体化してきました。

## イ. 渡良瀬遊水地の造成

### ・洪水による利根川の被害

明治43年(1910)8月洪水は、明治時代、利根川において最大の被害を与えた洪水です。この大洪水により利根川、渡良瀬川等の左右岸の至る所で堤防が決壊して、宅地・耕地が浸水しました。

この洪水が契機となり利根川や渡良瀬川の整備が進められ、渡良瀬川、思川からの洪水が利根川に影響しないように計画されました。

### 30年から40年に1度、江戸まではらんした水がおそう

年号	西暦	年号	西暦	年号	西暦
天明5年	1765	弘化元年	1844	昭和22年	1947
建永元年	1206	弘化3年	1846	昭和23年	1948
寛永元年	1624	明治18年	1885	昭和24年	1949
宝永元年	1704	明治23年	1890	昭和25年	1950
享保6年	1721	明治27年	1894	昭和33年	1958
享保13年	1728	明治29年	1896	昭和34年	1959
寛保2年	1742	明治31年	1898	昭和41年	1966
安永9年	1780	明治43年	1910	昭和47年	1972
天明3年	1783	昭和10年	1935	昭和56年	1981
天明6年	1786	昭和13年	1938	昭和57年	1982
享和2年	1802	昭和16年	1941	平成10年	1998

※西暦の年号は、東京まで被害がおよんだ洪水です

出典：利根川上流工事事務所パンフレット



1910年洪水 浸水状況

### ・渡良瀬川の改修と遊水地の整備

渡良瀬川の改修工事は、明治43年(1910)より直轄事業(国土交通省)として着手され、改修計画は、足利から利根川合流点までとし、支川秋山川及び渡良瀬遊水地に流入する思川、巴波川の改修と渡良瀬遊水地の整備を行う計画で、工事は川幅を下流に拡大していき、無堤部は新堤を築造して氾濫を防止し、河道の掘削及び堤防の拡築、また、新川を開削し、赤麻沼を中心とする遊水地に導くこととしました。



鋤簾(じょれん)式浚渫船



蒸気式ラダーエクスキャベター



藤岡地先開削部の通水

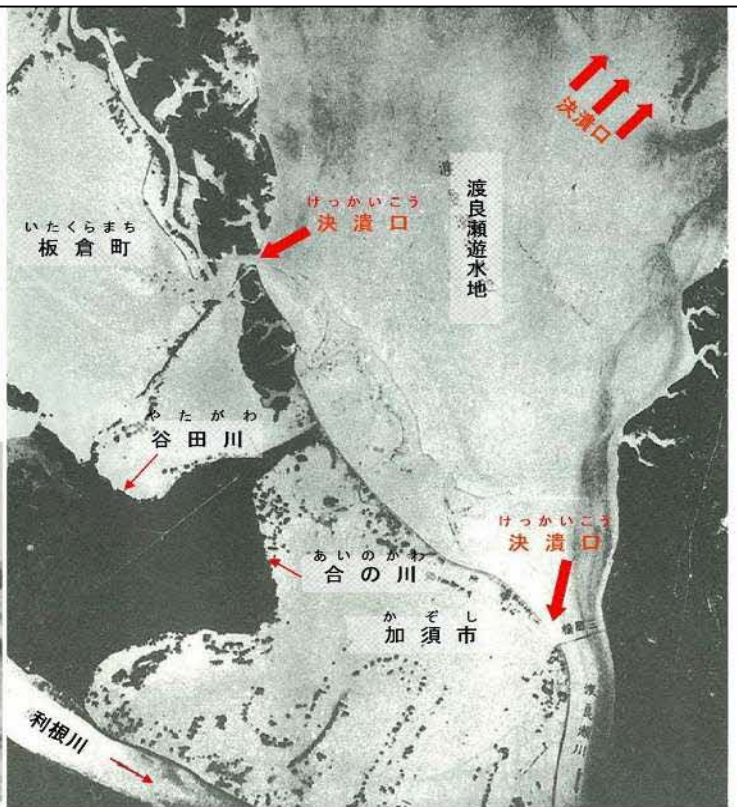
## 2. カスリーン台風と渡良瀬遊水地の調節池化

### ア. カスリーン台風による被害

昭和22年(1947)のカスリーン台風は、戦後最大の台風で利根川、渡良瀬川など関東全域に甚大な被害をもたらしました。関東地方では、1,100名の死者が、渡良瀬川でも750名の死者が出るなど大被害となりました。利根川の新川通り(右岸)の堤防が決壊し、その氾濫流は3日かけて東京に達しています。渡良瀬遊水地周辺の堤防も加須市、板倉町、栃木市、小山市の14ヶ所が破堤し、多くの家や水田、畑が水に浸かり大被害となりました。

ひがいにようきょう  
カスリーン台風による関東の被害状況

都県名	死者数 (人)	家屋の 浸水(戸)	家屋の 倒半壊(戸)	田畑の 浸水(ha)
群馬県	592	71,029	21,884	62,524
栃木県	352	45,642	5,917	24,402
埼玉県	86	78,944	3,234	66,524
茨城県	58	18,198	284	19,204
東京都	8	88,430	56	2,349
千葉県	4	917	6	2,010
計	1,100	303,160	31,381	177,013



向古河決壊口の堤防上にひなん



三国橋周辺では水位の上昇が続き、加須市向古河地先の堤防が越水・決壊し、川辺・利島地先は水没してしまいました。一部の地域では学校へ避難したり堤防上に仮小屋を作って避難したりしました。板倉町海老瀬地先では、堤防決壊部すぐ横にあった東武鉄道の線路の流失や多くの家屋、水田の冠水の被害を受けました。また、栃木市部屋地先、小山市生井地先でも堤防が決壊し、水没しました。



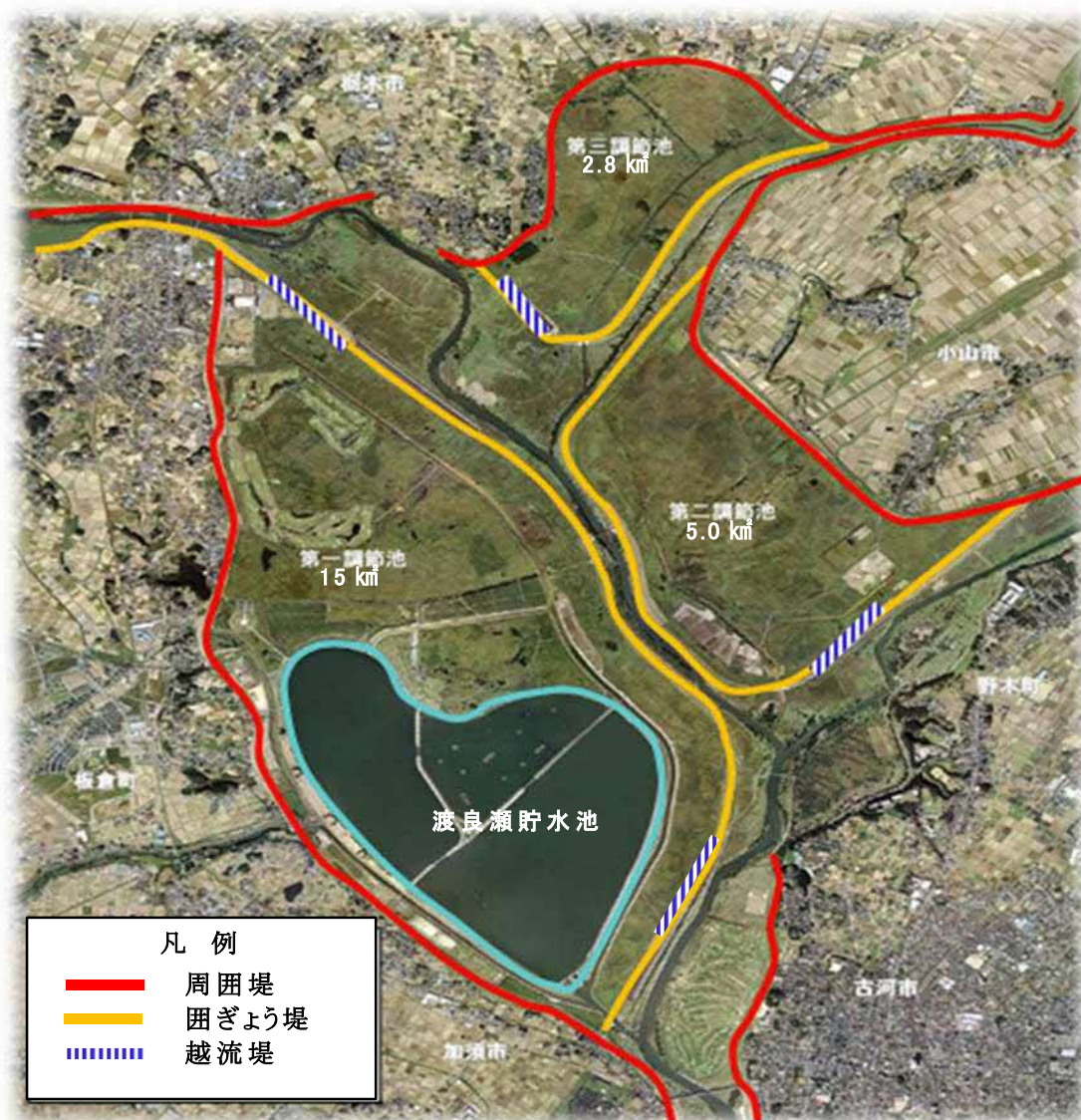
利島村(現加須市)小学校への避難の様子



利島村(現加須市)の浸水の様子

## イ. 渡良瀬遊水地と調節池化計画

渡良瀬遊水地は、足尾鉍毒事件を契機に渡良瀬川の改修と共に計画され、明治44年(1911)から周囲の堤防(赤線:周囲堤)を築いて遊水地としました。その後、カスリーン台風など大きな洪水が発生したことを踏まえて、遊水地をより効率的に活用するため昭和38年(1963)に遊水地内に堤防(黄線:囲ぎよう堤)を築く調節池化事業に着手しました。昭和45年(1970)に第1調節池、昭和47年(1972)に第2調節池、平成9年に第3調節池(1997)の3つの調節池を整備するとともに、各調節池に越流堤、排水門(調節池にたまった水を排水する施設)を整備しました。また、昭和51年(1976)に第1調節池内に洪水調節と都市用水の供給を目的とした貯水池化事業(多目的ダム建設事業)の整備(青線)に着手し、平成2年(1990)に概成し利用が始まりました。



囲ぎよう堤

囲ぎよう堤とは、調節池とするため、遊水地内を囲って作る堤防



越流堤

越流堤とは、水がある高さ以上になったら、遊水地に水が入るように周囲より低くした堤防

## IV. 渡良瀬遊水地の役割について

### 1. 渡良瀬遊水地のしごと

#### ア. 洪水を防ぐ

渡良瀬遊水地は、台風などの大水の時に遊水地に入る渡良瀬川、思川、巴波川の洪水を一時貯めて、利根川に一度に流れ込まないようにするために設けられた施設です。

渡良瀬遊水地の事業は、明治44年(1911)から始まり、堤防を作り渡良瀬川の流れを赤麻沼の方へ付け替えなどし、大正11年(1922)に完成しました。その後、カスリーン台風で利根川や渡良瀬川は大きな被害が発生し、さらに効率的に洪水を貯めるよう3つの調節池が作られました。洪水は、洪水時に調節池の堤防の一部を低くしてある越流堤より水が入り、利根川・渡良瀬川の水が少なくなったら排水門を開けて、貯めた水を流します。



平常時



調節池への越流状況



出水時



### イ. 飲み水などに利用

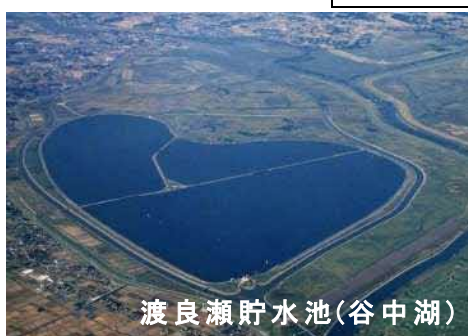
利根川の水を生活用水として利用している人は、約 2,700 万人とされています。そのうち、渡良瀬貯水池(谷中湖)の下流には約 1,000 万人の人々が暮らしていて、「首都圏の水がめ」として遊水地は大きな役割を担っています。

利根川から取水される水道用水の水源のうち、約 88%はダムによって貯水されたものです。利根川の水が減少した時に渡良瀬貯水池(谷中湖)は、利根川上流ダム群と連携しながら、生活用水の補給を行います。

渡良瀬貯水池は、毎秒 2.5 m<sup>3</sup>(立方メートル)の生活用水の取水(日量約 64 万人分)が可能で、「集水面積が大きい」、「供給地に近い(供給地に向けての補給が 2 日かかる上流ダムでも、渡良瀬貯水池からなら 5 時間程度で届く)」という、上流ダム群にないメリットを持っています。



貯水池面積	4.5 km <sup>2</sup>	東京ドーム約 100 個分
総貯水容量	2,640 万 m <sup>3</sup>	東京ドーム約 22 杯分 1 日約 64 万人分の水を確保





## 2. 渡良瀬貯水池(谷中湖)の水質対策

谷中湖は、生活雑排水や窒素・リン等が含まれた川の水が谷中湖に流入し、場合によってはプランクトンの発生でカビ臭くなることがあります。谷中湖の水質が悪化しないように様々な対策が取られています。

遊水地内に自生しているヨシ原を通して汚れを取り除く「ヨシ原浄化施設」、冬に谷中湖の水位低下を行い、貯水池の底を空気にさらしてカビ臭を抑える「貯水池水位低下・干し上げ」、渡良瀬川と比較して水質が悪い谷田川と渡良瀬川とを分離して取水する「谷田川分離施設」、浮島による太陽光を遮断して植物プランクトンの増殖を抑える「人口浮島」等の対策が取られています。



ヨシ原浄化施設



人工浮島



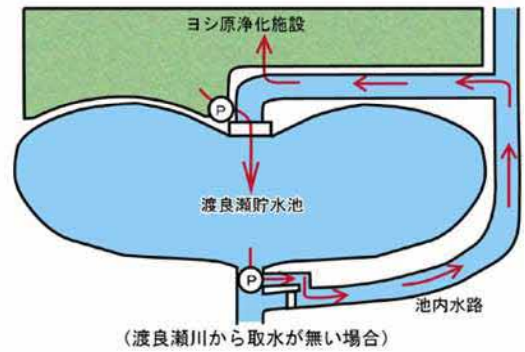
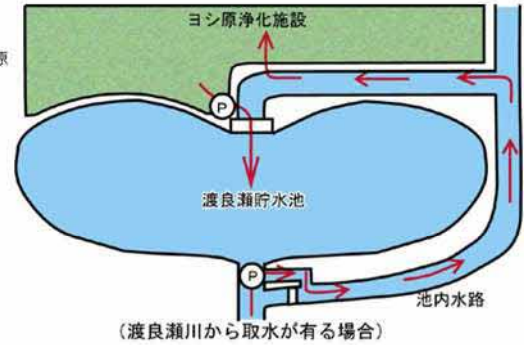
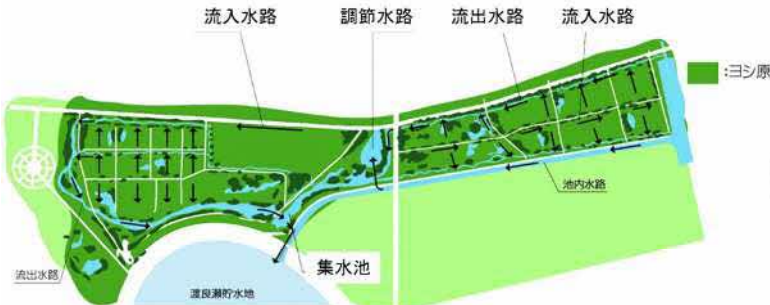
干し上げ



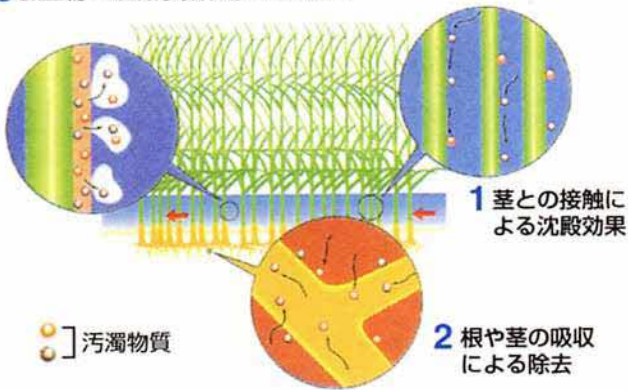
谷田川分離施設

・ **ヨシ原浄化施設**

谷中湖の水を、遊水地内に自生しているヨシ原に通して汚れの元となる窒素・リン等を「茎との接触による沈殿効果」、「根や茎の吸収による除去」、「微生物の吸着分解作用による除去」などによって取り除くことにより、谷中湖の水質を良くします。



**3 微生物の吸着分解作用による除去**



・ **水位低下・干し上げ**

干し上げとは、谷中湖の水位を下げることを言います。谷中湖のカビ臭の対策として、冬(1～3月)に水位低下を行っています。湖の底を空気にさらして、リン等が湖の底から出てくるのを抑えたり、直射日光に当てることにより、カビ臭の原因となる植物プランクトンを死滅させることによって、カビ臭を抑える効果があります。



・ **谷田川分離施設**

渡良瀬川と比較して水質が悪い谷田川を分離(壁を設置)して貯水池下流へバイパスし、きれいな渡良瀬川の水を優先的に渡良瀬貯水池(谷中湖)へ取水する施設です。



## V. 渡良瀬遊水地の環境について

### 1. 渡良瀬遊水地の自然環境

#### ア. 渡良瀬遊水地の自然

渡良瀬遊水地は本州以南で最大のヨシ原が存在し、湿地特有のヨシ群落、オギ群落を中心に生育しています。多様な植物が生育し、確認された植物の種類は約 1,000 種にのぼり、環境省のレッドリストに記載された絶滅危惧種は 65 種も見つかっています。

また、日本で見られる野鳥の約半分の約 264 種・5 亜種が確認され、そのうち 58 種は絶滅危惧種で、一つの地域で、これほどたくさんの種類が確認されるのは非常に珍しいことです。昆虫についても、これまで約 1,700 種が確認されており、そのうち 67 種が絶滅危惧種です。

#### 【植物】

約 1,000 種類（うち約 65 種類は絶滅危惧種）、

#### 【鳥類】

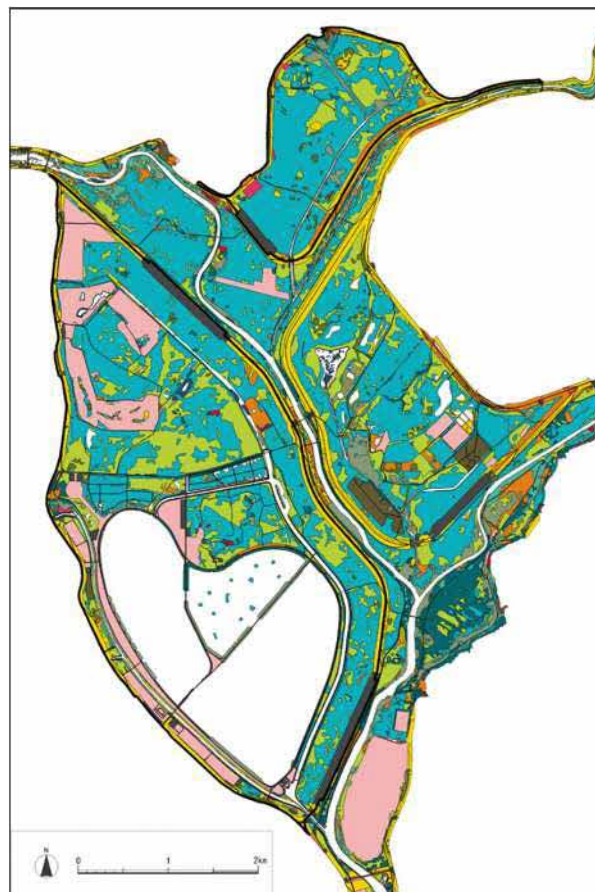
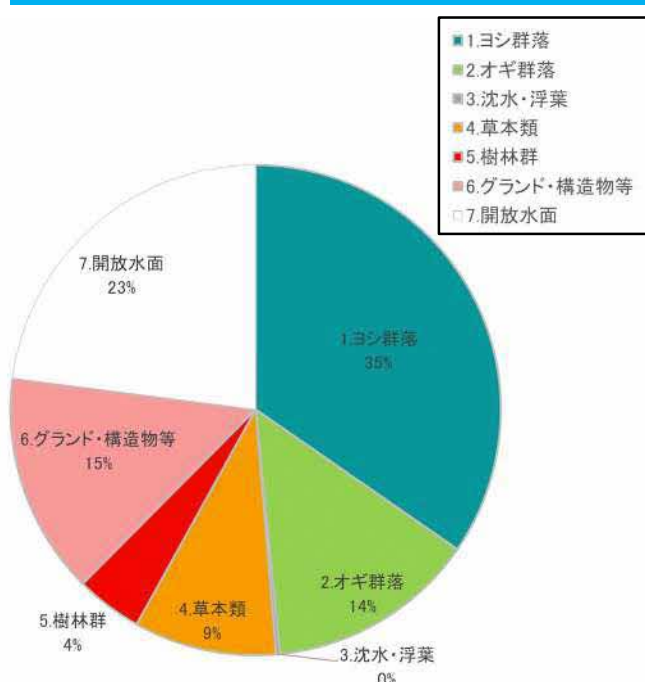
日本で見られる野鳥の半分の約 264 種・5 亜種が確認（うち 58 種類は絶滅危惧種）

#### 【昆虫】

約 1,700 種が確認（うち 67 種は絶滅危惧種）



## 渡良瀬遊水地 植生分布図



R3 年度渡良瀬遊水地植生図（提供：利根川上流河川事務所）

・ 野 鳥

渡良瀬遊水地では、これまでに約 264 種・5 亜種の野鳥が確認され、そのうち 58 種は国指定の絶滅危惧種です。一つの地域でこれほどたくさんの種類が確認されるのは非常に珍しいことです。

冬の遊水地では、ハイイロチュウヒやノスリなどワシ・タカ類が多くさん見ることができ、これまで 21 種が確認されています。特に、チュウヒの越冬地としては日本有数で、渡良瀬遊水地では食物連鎖の頂点にいるワシ・タカ類の日本屈指の越冬地となっています。



※食物連鎖とは  
自然界における食うものと食われるものとの一連の関係



チュウヒ

猛きん類を頂点とする食物連鎖の大きな生態系の形成・・・良好な自然環境



ミサゴ



ハイイロチュウヒ



コムズク

渡り鳥の中継地・・・渡良瀬遊水地の重要性とその環境



マガン



サシバ



ツバメのねぐら

・ 植 物

渡良瀬遊水地では、湿地特有のヨシ群落、オギ群落を中心に生育していますが多様な植物が生育し、確認された植物の種類は約 1,000 種にのぼります。トネハナヤスリやハナムグラなど国指定の絶滅危惧種は 65 種確認されており、これほど多くの貴重な植物が集中していることはとても珍しいです。



ノウルシ



アゼオトギリ



エビネ



サクラソウ



ヒメシロアサザ



トネハナヤスリ



タチスミレ



ミズアオイ



ミゾコウジュ



ホソバオグルマ



ワタラセツリフネソウ



ノジトラノオ

## ・ 昆虫

渡良瀬遊水地はヨシ原を中心とした湿地が広がり、これまでに約 1,700 種の昆虫が確認されています。そのうち 67 種は国指定の絶滅危惧種です。ワタラセハンミョウモドキ、イタクラキノメイガ、ワタラセミズギワアリモドキなど渡良瀬や周辺地域の名前の付く昆虫が 5 種います。また、シベリアユミアシケシキスイ、コウノハバチのように氷河時代に分布を拡大し、暖かくなった今でも生き続けているユニークな昆虫が生息しています。

※絶滅危惧種とは、

絶滅危惧種とは絶滅の恐れがある種のことです。絶滅危惧 I A 類、絶滅危惧 I B 類、絶滅危惧 II 類、準絶滅危惧に分類される。



ワタラセハンミョウモドキ



イタクラキノメイガ



ワタラセツブゲンゴロウ



チョウトンボ



クロイトンボ



ジャコウアゲハ

・ 魚

渡良瀬遊水地には、もともと貯水池(谷中湖)に生息していたウナギ、オイカワ等の在来種、ゲンゴロウブナ等の国内の他の地域から人間の活動によって入ってきた移入種(国内外来種)及びタイリクバラタナゴ等国外から人間の活動によって入ってきた国外外来種と、これまで80種の魚が確認されています。そのうち19種が国レベルでの絶滅危惧種です。

一方、貴重な生物とは別に、生態系を壊して在来種の生存を脅かし、人の生命や農作物などに被害を与える恐れのある生物「特定外来生物」が3種、特定外来生物ほどでないが生態系に悪い影響を与えると考えられる生物「要注意外来生物」が5種確認されています。

■絶滅危惧生物



ツチフキ



スゴモロ



ゲンゴロウブナ



キンブナ



クルマサヨリ



ニホンウナギ

■特定外来生物



オオクチバス



ブルーギル



チャネルキャットフィッシュ

■要注意外来生物



ソウギョ



タイリクバラタナゴ

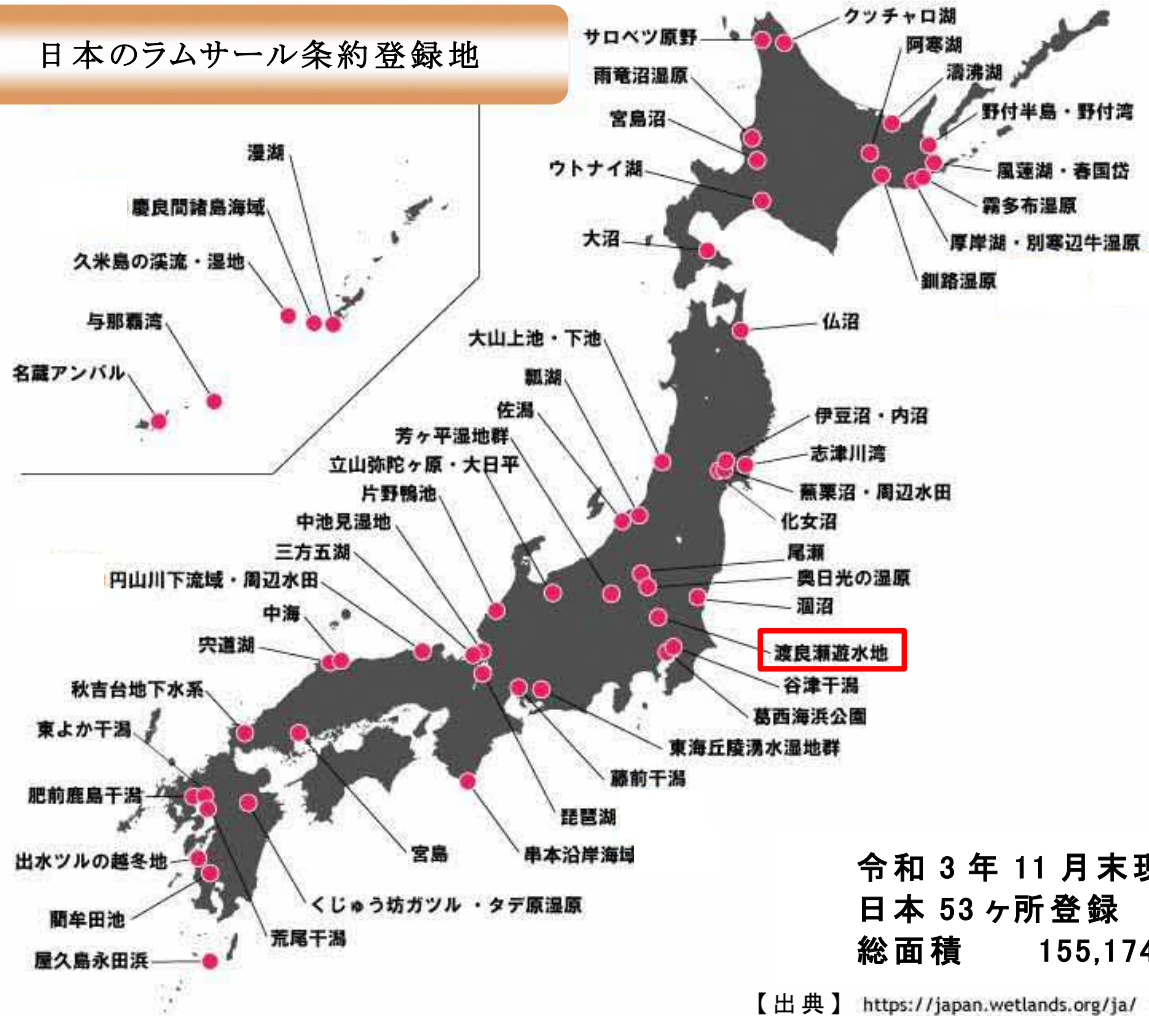


カムルチー

## イ. ラムサール条約とは

ラムサール条約は、1971年2月2日にイランのラムサールという都市で採択された、湿地に関する条約です。この条約は開催地にちなみ、一般に「ラムサール条約」と呼ばれています。正式名称は、「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」で、国際的に重要な湿地及びそこに生息する動植物の保全とその賢明な利用の促進を目的としています。

### 日本のラムサール条約登録地



### ◇渡良瀬遊水地 平成24年7月3日に登録

[渡良瀬遊水地の特徴]

本州で最大のヨシ原が存在し、国際的に重要な湿地で多様な動植物が生息





## 2. 渡良瀬遊水地の環境保全

### ア. 自然環境が保持されている理由

渡良瀬遊水地は、自然と人間が共存し、人手が緩やかに加わってきていて、植物によっては人間の働きかけによって生きてきたものも多くあります。

その一つが毎年のヨシ焼きにより木や枯葉が焼かれ、

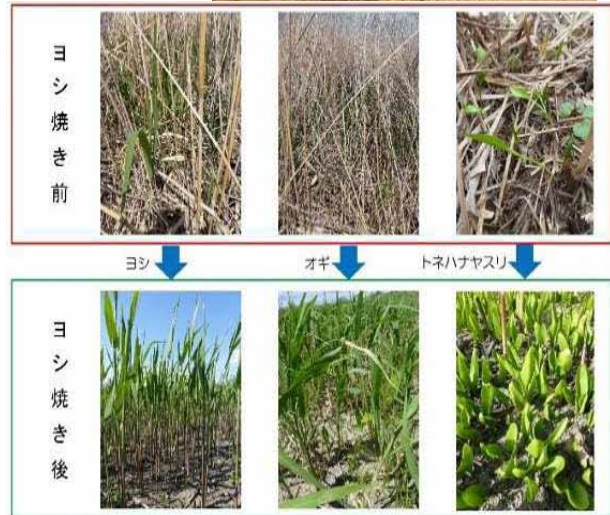
- ①害虫の駆除、
- ②良質のヨシの育成、
- ③野火による火災の防止
- ④草原に侵入してくる木本類の排除
- ⑤枯葉を焼くことで日当たりを良くし植物の発芽の生育の手助けをするなど植生環境の保全を図っています。

ヨシ焼き 3月

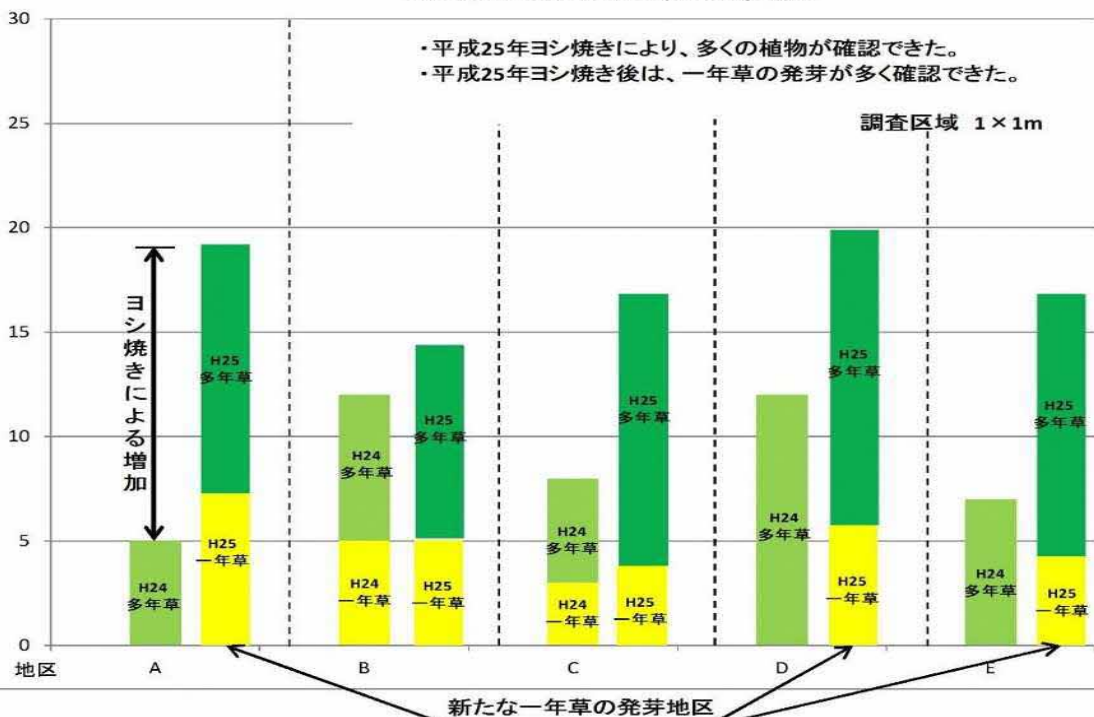


ヨシを焼かなかった時は、枯れたヨシの下から弱々しく植物が生えてきますが、ヨシを焼いた後は、日光も良く当たり力強く植物が育ちます。

遊水地を代表する貴重植物トネハナヤスリもヨシ焼き前は、枯葉の下から弱々しく育っていますが、ヨシ焼き後は、一面、密集しています。



ヨシ焼きによる植生変化(種数)



## イ. 環境保全への取り組み

渡良瀬遊水地は、乾燥化が進みセイタカアワダチソウ等の外来種が拡大するなど湿地環境は悪化してきました。失われた湿地環境を再生するために、第2調節池内では地下水位程度まで掘削する湿地再生事業が行われています。この事業により多様な動植物の生息場の再生を目指しつつ、研究・学習の場として活用できるようになっています。



湿潤環境形成実験地(1)[H26.1 完成]



環境学習フィールド(3)[H26.9 完成]



人為攪乱型実験地[H30.3 完成]

湿地再生地には、多くの埋土種子があります。掘削かく乱により新たな日照条件が確保され、埋土種子から発芽した植物です。(※埋土種子とは、発芽はしていないが土の中で生きている種子)

### [貴重植物が復元]

### [第2調節池でのコウノトリ]



ゴマノハグサ(絶滅危惧Ⅱ類)チョウジソウ(準絶滅危惧)

### [市民による湿地再生の活動状況]

#### 外来植物の駆除活動



#### 外来魚の駆除活動



### 3. 渡良瀬遊水地の利用

渡良瀬遊水地の利用者は、年間 100 万人以上に達し、首都圏における貴重なオアシスとなっています。近年の人々の草花や野鳥など自然環境への関心や健康のための散歩、アウトドア、レクリエーションへの要望の高まりを背景として第1調節池を中心に利用が増えています。

- 渡良瀬遊水地の広大な空間の中で様々な利用がなされている。



トライアスロン大会



マラソン大会



子どもサッカー

- 豊かな自然の中で五感を使った環境・体験学習が行われている。



旧谷中湖周辺での植物学習



旧谷中村での歴史学習



谷中湖周辺の野鳥学習

- 渡良瀬遊水地情報拠点施設

渡良瀬遊水地内には、渡良瀬遊水地の利活用及び湿地環境等に関する情報、資料の公開・展示、環境学習の支援を行っている情報拠点施設、「体験活動センターわたらせ」があります。施設内には、遊水地のパンフレット、DVD、パネルや冊子等が整備されており、また、双眼鏡、Eボートなどの体験学習の資機材の貸し出しや講習、研修、講演等に利用されるよう、机、イス及びシャワー設備等が整備されています。



体験活動センターわたらせ



研修室(1)



シャワー室



研修室(2)